

平成28年度 自己点検・評価報告書

新潟薬科大学
薬学部
大学院薬学研究科

目 次

I. 総括	1
II. 自己点検・評価票（委員会活動）	
薬学部・薬学研究科 委員会等構成員名簿	8
将来計画委員会	9
教育改革委員会	11
リメディアル教育支援室	12
ICT 教育推進室	14
FD 推進室	15
教務委員会	16
学生委員会	20
キャリア支援委員会	22
入試実施委員会	24
共用試験実施委員会 CBT 部会	25
共用試験実施委員会 OSCE 部会	26
臨床実務教育委員会	27
薬学総括演習 I 実施委員会	29
薬学総括演習 II 実施委員会	30
自己点検・評価委員会	31
薬用植物園運営委員会	32
研究科教務委員会	33
研究科入試委員会	35
研究科自己点検・評価委員会	36
研究科 FD 委員会	37

Ⅲ. 活動実績・自己点検評価票（教員）

杉原 多公通	40	中川 沙織	93
北川 幸己	43	飯村 菜穂子	96
渋谷 雅明	45	安藤 昌幸	99
小室 晃彦	47	福原 正博	101
前田 武彦	49	山口 利男	103
星名 賢之助	52	阿部 学	105
久保田 隆廣	54	齊藤 幹央	107
酒巻 利行	56	高津 徳行	110
中村 辰之介	58	田辺 顕子	112
前田 正知	60	武久 智一	114
若林 広行	62	田代 卓哉	116
上野 和行	64	島倉 宏典	119
朝倉 俊成	67	冨塚 江利子	122
坂爪 重明	70	佐藤 浩二	124
継田 雅美	72	内山 孝由	126
青木 定夫	74	関川 由美	129
白崎 仁	77	城田 起郎	131
本多 政宣	79	桐山 和可子	133
高橋 努	81	神田 循吉	135
本澤 忍	83	小林 真理子	137
浅田 真一	85	宮下 しずか	140
宮本 昌彦	88	大貫 敏男	143
川原 浩一	90	笹木 睦子	145

平成 28 年度 薬学部 自己点検・評価のまとめ

I. 教育活動

(1) 平成 28 年度薬学部在籍学生数及び平成 28 年度終了時での次年度進級者数

学年	在籍学生数	次年度進級者数 (平成 28 年度終了時)
1 年次	166 人	160 人
2 年次	181 人	158 人
3 年次	175 人	161 人
4 年次	191 人	167 人
5 年次	154 人	154 人
6 年次	178 人	107 人 (9/30 卒業 46 人)

平成 28 年度に各学年に在籍した学生数と年度終了時に進級が認められた学生数を示した。当年度中に発生した退学者数は 24 人、休学者数は 4 人であり、いずれも過去 5 年間で最少であった。特に 1 年次での退学率は 3.01%であり、前年度の 7.69%から大幅に減少した。

次年度に進級できない所謂留年者の数も当年度は 76 人であり、過去 5 年間で最少であった。6 年次の卒業延期生も 25 人であり、前年度の 46 人から大幅に減少した。

休・退学者や留年者の数が減少したことは評価できるものの、依然として相当数に上るのが現実であり、原因の解析と効果的な対策を打ち出すことが必要である。平成 29 年度から学生支援総合センターに学修支援部門が創設され、学生チューター制度がスタートするが、同時に各教員のよりきめ細かな学生指導が必要である。

(2) 平成 28 年度薬学共用試験結果

	受験者数	合格者数
CBT	167 人	166 人
OSCE	167 人	167 人
共用試験	167 人	166 人

4 年次学生が受験した平成 28 年度薬学共用試験の結果を示したが、残念ながら CBT において 1 名が不合格となった。

(3) 平成 28 年度臨床実務実習

施設	受入れ施設数	県内施設数	県外施設数
病院	43 施設	34 施設	9 施設
保険薬局	106 施設	99 施設	7 施設

	実習学生数	病院実習学生	薬局実習学生
I 期	99 人	40 人	59 人
II 期	146 人	68 人	78 人
III 期	63 人	46 人	17 人

平成 28 年度の臨床実務実習には、5 年次学生 154 名が I 期～III 期に分かれて実習を行った。各施設との対応は臨床実務教育委員会のメンバーが中心となったが、学部長と新任教員以外の薬学部教員が実習期間中に複数回各施設を訪問して実習学生の指導にあたった。

(4) 平成 28 年度国際交流活動

平成 28 年 11 月に、本学と国際交流を行っているマサチューセッツ薬科大学 (MCPHS) から 3 名 (教員 1 名、6 年次学生 2 名) を 10 月 10 日～15 日の期間に招聘し、学内で在学生や教職員を対象とした講義、セミナーを開催した。また、魚沼地区の保険薬局で実施している在宅医療の視察など、過疎地での薬剤師活動を紹介した。次年度は本学学生を MCPHS に派遣する。

また、夏休みを利用したニューヨーク州立大学フレドニア校での語学研修には、両学部で 12 名の学生が参加したが、そのうち薬学部生は 4 名 (2 年 2 人、3 年 2 人) であった。帰国後の 9 月 15 日に学内で派遣学生の報告会を開催した。

(5) 平成 28 年度第 102 回薬剤師国家試験結果

全体		新卒者		既卒者 (旧 4 年制課程卒業生除く)	
受験者	214 名	受験者	107 名	受験者	103 名
合格者	154 名	合格者	94 名	合格者	58 名
全体合格率	72.0%	新卒者合格率	87.9%	既卒者合格率	56.3%
全国平均	71.58%	全国平均	85.06%	全国平均	50.83%

平成 29 年 2 月に実施された第 102 回薬剤師国家試験の結果は上記の表のとおりである。新卒者の合格率は約 88%であり、全国平均を 3%ほど上回ったが、卒業に至らなかった学生が 25 人いたことを考えなければならない。101 回、102 回の国家試験問題が比較的穏当なものであったこともあり全国平均を上回る結果となったが、卒業延期生をさらに少なくすると同時に、全国平均の合格率を上回る状況を継続するための努力が必要である。

(6) 平成 29 年度入学試験結果

区分	志願者数	合格者数	入学者数
推薦入試	32 人	30 人	30 人
特別選抜入試*	4 人	4 人	2 人
一般入試 (I 期)	146 人	136 人	89 人
一般入試 (II 期)	30 人	21 人	11 人

一般入試 (III 期)	11 人	5 人	1 人
センター利用入試 (A 日程)	86 人	81 人	16 人
センター利用入試 (B 日程)	11 人	5 人	1 人

(* 学士・社会人)

平成 28 年度に実施した入学試験の結果は上記したとおりである。志願者数は昨年度（平成 27 年度）から約 25%減少したが、入学者数は 150 名（前年度 158 名）であった。なお、入学する学生の県内比率は全体の 70%であった。

2 年続けて入学者が 150 名台と入学定員を充足できていない。特に今回の入試において、志願者が前年度から 100 名以上減少したことの原因については十分に把握できておらず、次年度以降の予測もつきにくい状況にある。

(7) 平成 28 年度大学院薬学研究科について

1) 平成 28 年度大学院薬学研究科在籍学生数、学位（博士）取得者

学年	在籍者数	修了者数
博士 1 年次	0 名	
博士 2 年次	0 名	
博士 3 年次	5 名	2 名（早期修了）
博士 4 年次	2 名	1 名

平成 28 年度に大学院薬学研究科に在籍した学生は表のとおりである。このうち 4 年次を修了する 1 名及び 3 年次に在籍する 2 名（早期修了を認められた者）について学位審査を行い、博士（薬学）の学位を授与した。早期修了に関しては、4 年制博士課程の設置時に制度化していたが、今年度該当者が出てきたことから認定条件の申し合わせを整備し、それに則って審査を行い認定したものである。なお、平成 28 年度に学位を授与された 3 名はいずれも外国人学生であった。

2) 平成 29 年度大学院薬学研究科入学試験結果

平成 29 年度大学院薬学研究科入学試験の結果、2 名が大学院博士課程への進学を決定した。そのうち 1 名は平成 28 年度薬学部卒業生であり、もう 1 名は応用生命科学研究科博士前期課程の修了者である。また、応用生命科学研究科博士前期課程の薬科学コースへ、1 名の 4 年制薬学部（本学）卒業生が進学を決定した。

6 年制学部を基盤とする 4 年制博士課程の設置目的にある将来の薬学を牽引する人材養成の観点及び各研究室での研究活動の活性化の観点から、6 年制薬学部を修了した博士課程学生の受入れをこれまで以上に進める必要がある。

II. 研究活動

(1) 平成 28 年度研究業績（論文発表、学会発表）

各教員の研究に関する活動状況は、本自己点検評価書に纏めている。

基礎系教員も含めて薬学教育に関連する学会発表が多くなってきていること、また両学

部にまたがって教職員協働のドライの研究を支援する学内公募制の研究補助金制度が当年度から始まったことなどは評価できるものの、モデルコアカリキュラム（改訂版）に沿った新カリキュラム移行に伴う教育への負担増から、全般的に研究活動の停滞は否めない。

こうした中で、卒研究生が関わる学会発表も少しずつではあるが増加にあることは明らかな傾向である。各研究室へ配分される研究費、機器を含めた研究設備などは完全とは言えないまでも整備されていることから、人的な問題が研究活動を活性化する上で一番の障壁と考えるが、大学院学生の確保、研究支援職員の活用、学内・学外との共同研究など各研究室で出来る限りの工夫を行って欲しい。

（２）平成 28 年度競争的外部資金獲得状況

平成 28 年度に薬学部教員が研究代表者として申請した科研費については、新規採択件数が 2 件、継続採択件数が 8 件であった。事務部基盤整備課による科研費申請の支援活動もある中で、科研費の申請を行わない教員が相当数いる状況を改善する必要がある。

なお、科研費以外の外部資金に関して、2 件の新規採択と 2 件の分担継続があった。

（３）平成 28 年度海外出張及び国際学会での発表

平成 28 年度に海外での学会発表を行った教員は、6 名であった。海外での研究成果の発表を行っている教員は固定されてきている傾向があり、国際学会への若手教員の積極的な参加を促したい。

III. 社会貢献活動

多数の教員が所属学会において評議員や幹事、学会誌の編集委員などで学術分野の振興に貢献している。さらに複数の教員が日本薬学会、科学技術振興機構の専門委員、学術振興会の審査委員など中央の機関で委員として参画している。

新潟県内での薬剤師職能団体の委員を兼任している教員も多く、大学と各種職能団体との接点となっている。

県や地元市町村との地域連携を目指す活動には大学を挙げて取組んでおり、薬学部教員の参加も多いことは評価できる。ただし、市民向けの健康講座での講師、高等学校への出張講義を行う講師など学外向けの取組みに関わる教員が固定化されてきている。より多くの教員が参加して、バラエティに富んだ教育・研究活動の発信をお願いしたい。

IV. その他

平成 28 年度は、薬学教育評価機構による「薬学教育（6 年制）評価」を受審した年度であった。前年度から準備した各資料をもとに、自己点検評価書を作成・提出（平成 28 年 5 月）し、書類審査及び訪問審査（平成 28 年 10 月）を経て、「適合」の認定を得ることができた。

今回の教育評価では、幸いに「適合」の評価を受けたが、改善すべきと指摘された事項も多くある。こうした改善を指摘された教育内容及び研究活動については、薬学部にも所属する全教員が真摯に受け止め、改善に向けた取組みを進めて欲しい。特に FD 活動の重要性が教員によく認知されていない点が教育評価でも指摘されており、教育手法や成績評価の

改善だけでなく、教員の教育・研究活動の活性化を目指した FD 活動にしていく必要がある。

平成 30 年（2018 年）以降、地方の私立大学における入学者の確保は益々厳しい状況になることが予想されている。目標に向かって全教員のベクトルを結集できなければ、大学としての総合力は発揮できずに終わってしまいかねない。将来の薬科大学、薬学部をしっかりと見据えた言動を各教員にお願いしたい。

平成 29 年 12 月

薬学部長 北川 幸己

自己点検・評価票
(委員会活動)

平成28年度 薬学部・薬学研究科 委員会等構成員名簿

薬学部

委員会等	委員長	副学部長・委員									
副学部長	-	杉原	酒巻								
将来計画委員会	北川	杉原	若林	朝倉	星名	中村	酒巻	高橋	小室		
教育改革委員会	北川	杉原	星名	前田	武久	山口					
リメディアル教育支援室	北川	田辺	白崎	田代	島倉	武久	冨塚				
ICT教育推進室	杉原	安藤	高津	浅田	本澤	阿部	城田	桐山			
FD推進室	前田	安藤	山口	中川							
教務委員会	朝倉	前田	酒巻	福原	宮本	齋藤	浅田	佐藤浩			
カリキュラム部会	朝倉	坂爪	継田	若林	齋藤	浅田	福原	宮本			
学生実習部会	-	大貫	笹木								
学生委員会	小室	高橋	青木	川原	冨塚	田代	武久	中川			
キャリア支援委員会	酒巻	坂爪	川原	笹木							
入試実施委員会	星名	久保田	本多	白崎	飯村	佐藤浩	内山				
共用試験実施委員会	北川										
CBT部会	高津	(藤原)	島倉	大貫	笹木						
OSCE部会	坂爪	朝倉	齋藤								
臨床実務教育委員会	朝倉	坂爪	継田	齋藤	阿部	若林	青木	(渡邊)	久保田	宮下	
臨床実務教育委員会拡大委員	-	張馬	笹木	神田	内山						
薬学総括演習I実施委員会	前田	(藤原)	高津	中川							
薬学総括演習II実施委員会	本澤	前田	安藤	島倉	久保田	田辺	(藤原)	青木	坂爪	阿部	山口
卒業試験作問支援委員	-	飯村	高津	齋藤	佐藤浩	白崎	大貫				
自己点検・評価委員会	北川	杉原	朝倉	酒巻	山口						
薬用植物園運営委員会	白崎	渋谷	大貫								

薬学研究科

委員会	委員長	委員								
研究科教務委員会	酒巻	上野	青木							
研究科入試委員会	上野	(大和)	久保田	川原						
研究科自己点検・評価委員会	北川	皆川	福原							
研究科FD委員会	前田	渋谷	安藤							

括弧は1年任期

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	将来計画委員会
構成員（委員長の名前の前に○） ○北川幸己、杉原多公通、若林広行、朝倉俊成、星名賢之助、中村辰之介、酒巻利行、高橋努、小室晃彦			
1. 平成 28 年度活動内容 <ul style="list-style-type: none"> ・将来計画委員会の開催 第 1 回（平成 28 年 4 月 22 日）、第 2 回（6 月 10 日）、第 3 回（7 月 8 日）、第 4 回（9 月 9 日）、第 5 回（10 月 7 日）、第 6 回（11 月 11 日）、第 7 回（平成 29 年 1 月 6 日）、第 8 回（3 月 14 日） ・当該年度は、薬学教育評価機構による「教育評価」の審査を受ける年度でもあり、本委員会は教務委員会、自己点検・評価委員会などと協働して「教育評価」に対応した。 ・教員人事及び研究室の整備に関して、本委員会が中心となって協議した。 ・推薦入試合格者に対して、入学時までの補習教材（株式会社ナガセ/東進ハイスクール）の導入を行った。 ・平成 29 年度の学生実習用機器購入、講座順番機器購入について、各研究室からの要望をまとめ、購入を決定した。 			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 <ul style="list-style-type: none"> ・薬学部では当年度に薬学教育評価機構による薬学教育評価を受審したが、将来計画委員会、自己点検評価委員会、及び教務委員会が中心となって対応を行った。幸い「適合」の認定を得たが、改善を指摘された項目については、想定内であったものの今後の対応が必要であり、各教員が真摯に受け止めて改善に向けた対策を提案、実行していく必要がある。 ・教育評価関係以外では、人事等の案件への対応が当年度の将来計画委員会の中心となった。薬学部の教員構成において助教層の高齢化が大きな問題であったが、准教授への昇任を提案し、審査の結果昇任させることができた。また、空席となっていた「薬効安全性学」及び「生化学」に関して、教授選考を行って任用することができた。 ・①入学試験受験生を増加させることとともに、入学者の定員確保を目指すこと、②学力不振学生に対する「学び」の支援を重点項目としていた。入試に関しては「入試委員会」、「広報室」と連動した活動を行ったが、定員を確保することができなかった。ここ数年志願者が減少している原因を調査し、新たな対応策を提案していく必要がある。一方、「学び」の支援に関しては全学的な「学修支援」の機運の中で、「学生支援総合センター」に学修支援室が設置されてサポート体制がスタートした。 			

3. 問題点と改善・解決に向けた方策

- ・定年退職後の教員補充について：できるだけ補充していく方策をとるが、今後の薬学教育にどのような分野・領域が必要であるかを本委員会です分に議論した後に提案していく。また、28年度以降定年を迎える教授も多いことから、2人体制の研究室の扱いも含めて、将来薬学教育を展開していく上でどのような研究室・教員組織とすべきかについても議論をしていく。
- ・新津駅西口校有地に関して：ここ数年の議論を整理して、附属薬局の設置を念頭に置いた薬学部の提案を行っていく。
- ・薬学教育評価で改善を指摘された以下のような事項に関して、平成29年度では具体的な対応策を提案し、平成30年度以降の改善につなげる。
 - ・教員の増員
 - ・FD活動の活性化
 - ・入試制度の改善
 - ・若手教員の海外研修・留学の推進
 - ・科研費の獲得状況の改善や教員の研究業績の改善など、研究活動の活性化

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	教育改革委員会
構成員（委員長の名前の前に○） ○北川幸己、杉原多公通、星名賢之助、前田武彦、武久智一、山口利男			
1. 平成 28 年度活動内容 <ul style="list-style-type: none"> ・従来、①低学年でのリメディアル教育（リメディアル教育支援室）、②教員の FD 活動（FD 推進室）、③ICT 教育の充実（ICT 教育推進室）に関しては、それぞれの委員会が独立して活動にあっていた。いずれも薬学部の教育を推進していく上で重要な活動であるが、今ひとつバラバラ感があったことから、これらを統括してより効果的・相乗的に教育活動の改善につなげることを目的として、「教育改革委員会」を立ち上げた。 ・平成 28 年 5 月 12 日に委員会を招集し、①～③の委員会で 28 年度に行う活動内容の確認を行った。 			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 <ul style="list-style-type: none"> ・教育改善・教育改革に係る各委員会を統括する目的で当委員会を設けたが、委員会としての具体的な活動までには至らなかった。 ・一方で大学全体の教育改革の機運のもとで、学長主導による提案型の「教育改革支援プログラム」の学内公募があり、5 件のプログラムが採択されて実行に移されている。 ・教員の FD に関しては、FD 委員会が 2 回の開催を行っている。FD 講演会の内容としては時期的にタイムリーなものもあるが、実際の各教員の担当授業等の中でどのように生かされているかのフォローができていない。また、FD 活動にまったく参加しない教員も未だに存在しており、教員の意識改革の遅れが目立つ。 			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策 <ul style="list-style-type: none"> ・リメディアル教育に関しては、低学年次で正規の授業に対する「振り返り」を含めた演習科目、さらには他の科目との関連を意識させる複合系の科目が新カリキュラムの中で進行中である。その効果の検証を行っていく必要がある。 ・また、リメディアル教育と関連して、1 年生を対象とした定期試験にあたっての準備を意識させるプログラムを開始したが、自由参加としているため参加する学生が少ない。また、回を重ねていくにつれ脱落（？）していく学生も多く、改善する必要がある。 ・全学の学生の修学支援の観点から、「学生支援総合センター」の中に「学修支援部門」が設置され、教員（兼任）も配置され活動が始まった。また、平成 29 年度から上級生をチューターとした修学支援の試みが始まるが、教育改革委員会としてもその効果等に関して注視していく。 ・FD に関しては、FD 委員会が提案する研修会だけでなく、薬学部の教育・研究に関してさまざまな委員会から FD に関する研修会の提案が挙がってくるような形にしていく必要があり、本委員会がコアとなって機能させたい。 			

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	リメディアル教育支援室
構成員（委員長の名前の前に○） ○北川幸己、田辺颯子、白崎仁、田代卓哉、島倉宏典、武久智一、冨塚江利子			
1. 平成 28 年度活動内容 平成 28 年度に再編成されたリメディアル教育支援室（以下、支援室）では、新カリキュラム（平成 27 年度以降入学生対象）の実施に伴い廃止・解消された自由科目に代わる学習支援活動として「定期試験前に試験勉強の計画を立てるワークショップ」（以下、WS）を 1 年生を対象として前後期に実施した。WS では、計画立案及び学習方略に関する情報提供の後、長期計画立案を行った。その後、定期的実施した個別面談（フォローアップ・ミーティング；以下、MTG）において支援室構成員が短期計画立案及び遂行に関して助言・指導を行った。また、全員を対象として実施することは困難なことから、前期は 1 年次科目にて実施した授業内試験の結果を基に参加推奨者を選別し、後期は希望者のみを対象とした。			
【前期】 WS 実施日：6/1 MTG 実施日：6/10, 6/17, 6/24, 7/1, 7/8, 7/15, 7/22（全 7 回） 対象学生：当支援室が参加を推奨した者（49 名）及び希望者 WS 参加者：51 名（うち参加推奨者 48 名、希望者 3 名） MTG 参加者（4 回以上参加）：29 名（うち参加推奨者 26 名、希望者 3 名）			
【後期】 WS 実施日：11/25 MTG 実施日：12/2, 12/9, 12/16, 12/22, 1/9（全 5 回） 対象学生：希望者 WS 参加者：1 名 MTG 参加者：1 名（全 5 回参加）			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 今回の活動内容は従来の自由科目のような個別科目の学習内容に関わるものではなく、計画立案・遂行に関わる一般的なスキルへの働きかけを通して学生の学習習慣や学習方略に働きかけることを意図したものである。また、高校とは異なり、本学の定期試験は科目数も多く試験範囲も広いことから、定期試験未経験の 1 年生に対する注意喚起の意図も有していた。			
WS/MTG 参加者については、WS/MTG 不参加であった場合に比べて、定期試験について多少は意識し、勉強する時間も増えたと思われるが、仮にそうであったとしても、それが定期試験成績に影響を与えたのか、また、与えていた場合どれくらい与えていたのかは不明である。			

3. 問題点と改善・解決に向けた方策

(1) 本学学生の気質を考慮する必要

参加推奨者を指定した場合、その後脱落者が多数出たものの、MTG についても（強制でないにも係わらず）継続して出席する者がいた一方で、希望者のみを対象とした後期については WS/MTG 参加者が1名だけであった。これは本学学生が指示に素直に従う性向を持つ者が少なくないことを示す一方で、自主性に任せると易きに流れるという性向を示している。今後は施策を講ずる場合はこれらの点を念頭に置く必要がある。

(2) 自由科目の再開講の検討

平成 28 年度は計画立案・遂行に関する一般的なスキルに焦点を当てた活動であったが、個別科目（特に、基礎教育科目）の学習内容に焦点を当てた活動を実施する必要がある。新カリキュラム実施との兼ね合いから廃止・解消された自由科目であるが、廃止された科目に関しては再開講を模索すべきだと考える。

(3) 専門的知見の収集・検討

支援室構成員が保持する学習に関する素朴理論（あるいは、思い込み）に基づいた施策ではなく、学習一般に関する知見に拠った施策を検討すべく、情報収集を継続する。

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	ICT 教育推進室
構成員（委員長の名前の前に○） ○杉原多公通、安藤昌幸、高津徳行、浅田真一、本澤忍、阿部学、城田起郎、桐山和可子			
1. 平成 28 年度活動内容 ・自己学習支援システムの拡充を目指し、総括演習試験、卒業試験の入力に向けた準備。 ・VP（virtual patient）システム構築に向けた意見交換。			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 ICT 活用教育の 3 つの柱のうち、cyber-NUPALS はティーチング・ポートフォリオという観点から教務委員会の管轄下であり、臨床実務実習支援システムは臨床実務教務委員会及び教務委員会の管轄下にある。自己学習支援システムの拡充と新規 ICT 教育システムの立案が ICT 教育推進室の主課題であり、地道ではあるが、これに向けて活動をしている。			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策 自己学習支援システムに掲載されている問題を、精査する必要があるが、一万数千問を超える問題が掲載されていることから、この精査には膨大な時間と労力を要する。さらに、問題を精査している間も教員が問題を投稿・修正できるようになっていることから、何らかのシステム上の制約を設ける必要があり、システム作成担当企業の技術者と打ち合わせ中である。2 年ぐらいを目途に、掲載問題の精査と今後の登録方法の変更、さらに、新たな問題の掲載に向けた協力依頼を教員にしていきたいと考えている。			

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	FD 推進室
構成員（委員長の名前の前に○） ○前田武彦、安藤昌幸、山口利男、中川沙織			
1. 平成 28 年度活動内容 以下の活動を行なった。 <ul style="list-style-type: none"> ◆FD 研修会実施 <ul style="list-style-type: none"> 第 1 回講演演題：「新カリキュラムにおける卒業研究の指針」 講 師：酒巻 利行 先生（公衆衛生学研究室 教授） 日 時：平成 28 年 8 月 29 日（火） 16：00～17：00 第 2 回講演演題：「問題解決型学習の実践と学習成果の直接評価」 講 師：小野 和宏 先生（新潟大学歯学部口腔生命福祉学科 教授） 日 時：平成 28 年 8 月 30 日（火） 16：00－17：30 ◆学会参加 <ul style="list-style-type: none"> 学会名：第 1 回日本薬学教育学会大会 会 期： 2016 年 8 月 27 日（土）・28 日（日） 会 場： 京都薬科大学 主 催： 日本薬学教育学会 			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 講演形式の研修を二つ行なった。卒業研究の指針については、教務委員会との協力の下、全学への周知が必要であることから実施した。また、PBL については、授業に積極的に取り入れられている新潟大学の教員を招いて、その手法と効果について講演の後、意見交換を行なった。いずれも、現在の本学教育現場にて、大変参考となる内容であり、研修者にとっては有意義であったとおもわれる。しかし、毎回のことであるが、薬学部教員の参加が 7 割程度に止まり、参加メンバーも固定されているのは、残念なことである。学会参加については、FD 委員を学会に派遣し、その内容を大学にて報告する形で、実施した。当学会は本年度 kick-off された学会であり、今後の動向を注視する必要から、委員を派遣した次第である。			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策 今年に限った問題ではないが、FD 研修への参加人数を増やすこと、また、きまって参加しない教員の参加を促す方策が必要であり、それを模索する。講演型の研修のみならず、ワークショップ型の研修の実施を検討する。			

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	教務委員会
構成員（委員長の名前の前に○） ○朝倉俊成、前田武彦、酒巻利行、福原正博、宮本昌彦、齊藤幹央、浅田真一、佐藤浩二			
1. 平成 28 年度活動内容 <委員会等開催実績> ・委員会開催回数 20 回（内持ち回り 4 回） ・作業部会開催回数 3 回 （この他必要に応じてワーキンググループ内での会議を実施。） <活動内容> 教務委員会の活動内容は非常に多岐にわたるが、主な活動内容、審議事項について以下に時系列で記載する。 【4 月】 ・ <u>オリエンテーション、保護者説明会への対応</u> →各学年のオリエンテーションでの説明について、教務委員が分担して対応した。また保護者説明会でカリキュラム、教育支援体制について説明を行なった。 ・ <u>平成 28 年度入学生の既修得科目の履修認定及び単位認定について</u> →学士入学者等に対する単位認定試験の実施、履修認定確認、単位認定案の作成等を行い、教授会へ上程した。 ・ <u>過年次未修得（不合格）科目の再履修について</u> →時間割上の空き時間を利用した不合格科目の再履修への対応。 ・ <u>旧カリキュラム 3 年次科目のビデオ撮影について</u> →平成 29 年度以降の再履修に備え、対象科目の講義内容をビデオに録画することとした。 ・ <u>新カリキュラム「卒業研究」に関する指針の策定に向けた準備</u> →新カリキュラムの「卒業研究」の指針について、酒巻委員が案を作成することとし、年度内での完成を目指し作業を進めていくこととした。 【5 月】 ・ <u>平成 28 年度「卒業研究Ⅱ」論文審査・発表・公開手順について</u> →卒業研究Ⅱの審査員決定方法、審査日程等の作成を行い、教授会へ上程した。 ・ <u>卒業研究に関する指針（新カリキュラム）について</u> →教務委員会にて酒巻委員による進捗状況の説明。今後も委員会で協議を重ね、教授会の審議を経て年度内の決定を目標とすることを確認した。 ・ <u>「早期体験学習Ⅱ」実施計画について</u> →実施計画の作成と実施内容の確認、教務委員引率者の確認と教務委員以外への引率協力要請を行った。			

・新カリキュラム学生の研究室配属について

→WG（酒巻委員、前田委員、佐藤委員）を設置、具体的な案を作成することを確認した。

【6月】

・平成28年度「卒業研究Ⅱ」題目・指導教員・審査員（案）について

→教務課による題目・指導教員・審査員一覧（案）の作成と教務委員による確認。教授会への上程。

・追・再・再々試験受験届・受験票の変更について

→券売機導入による受験料納付方法が変更され、併せて追・再・再々試験受験届及び受験票の様式を変更した。このことに伴いアドバイザー及び研究室主任の先生に定期試験成績通知表配付時、受験届けを一緒に配付することとした。また教授会で協力要請を行った。

【8月】

・平成29年度学年暦、時間割について

→浅田委員が作成した案について、委員会内で確認。今後の委員会で詳細を詰めていくこととした。

【9月】

・平成28年度4年生仮進級判定について

→単位取得状況の確認、進級要件の確認を行い、教授会へ上程した。

・平成28年度「卒業研究Ⅱ」単位認定について

→審査結果の確認を行い、教授会へ上程した。併せて発表会を欠席した学生に対する評価方法について議論し、追・再発表会を再試験相当として実施し、評価を行った。

・卒業研究に関する指針（新カリキュラム）について（継続審議）

→進捗状況の確認、ルーブリック評価表の変更検討。

【10月】

・卒業論文著作権確認作業の実施について

→リポジトリで公開済みの論文に関し、著作権法上問題となる記載がないかどうかの確認作業を実施した。「卒業論文Ⅰ」および「文献調査を主として行っている卒業論文Ⅱ」については教務委員会が確認作業を行った。「調査研究による卒業論文Ⅱ」および「実験・調査研究を行っている」と判断された一部の卒業論文Ⅰについては指導教員への確認作業を依頼した。

・薬学教育評価への対応

→薬学教育評価の閲覧資料の内容点検への対応。

・早期体験学習Ⅰ（病院・薬局見学）について

→11月実施に向け実施計画の作成と実施内容の確認、教務委員引率者の確認。

【11月】

・平成27年度薬学部5年生進級判定について

→単位取得状況の確認、進級要件の確認を行い、教授会へ上程した。

・平成29年度学士入学者2年次編入基準について

→編入基準の確認を行い、教授会へ上程した。

・転学部試験実施要項について

→実施要領の作成を行い、教授会へ上程した。

・平成28年度「卒業研究Ⅰ」論文審査について

→卒業研究Ⅰの審査員決定方法、審査日程等の作成を行い、教授会へ上程した。また、平成28年度

から著作権について指導教員がチェックするためのチェックリストを作成し、審査プロセスに追加した。

・ 平成 28 年度研究室配属方法について

→従来からの定員配分ルールに基づき、配属方法の確認を行い、教授会へ上程した。

【12 月】

・ 薬学部授業科目履修規程の改正（選択科目関連）について

→薬学教育評価における「選択科目の履修が低学年次に集中し高学年の履修者がいない」との指摘を受けたことから、履修規程を改正し、平成 29 年度 1 年次入学生から適用するための準備を開始した。

・ 平成 29 年度開講授業科目担当者について

→平成 28 年度末退職予定教員担当科目を中心に平成 29 年度科目担当者の選定、依頼作業を行った。

・ 平成 28 年度「卒業研究 I」論文審査員について

→論文審査員について調整を行ったところ、希望審査員に偏りがあったことから、審査担当数を一部修正の上、審査員を選定し、教授会へ上程した。

・ 卒業研究に関する指針（新カリキュラム）について（継続審議）

→教務委員会にて、酒巻委員からループリック評価表の改訂に関する説明があり内容について議論した。

【1 月】

・ シラバス入稿に向けた準備、内容点検、科目担当者との調整等

→科目担当者決定からシラバス入稿までのスケジュール管理、シラバス内容の点検を実施した。

・ 卒業研究に関する指針（新カリキュラム）について（継続審議）

→ループリック評価表に関する意見交換および評価シミュレーションの実施。

・ 平成 29 年度学年到達度試験について

→問題作成依頼及び試験実施科目に関する確認。教授会にて試験実施に向けた協力依頼。

・ 入学前教育に向けた準備について

→株式会社ナガセ（東進ハイスクール）の DVD 教材を利用した自己学習プログラムを提案。

【2 月】

・ 平成 28 年度 6 年生卒業判定について

→単位取得状況の確認、卒業要件の確認を行い、教授会へ上程した。

・ 平成 28 年度卒業研究室配属方法について

→配属定員数、配属ルールについて案を作成し、教授会へ上程した。

・ 卒業研究に関する指針（新カリキュラム）について（継続審議）

→変更したループリック評価表に関する意見交換、さらなる議論をもとにした指針内容の改訂。3 月教授会での審議に向けた最終確認。

・ 平成 28 年度「卒業研究 I」の単位認定について

→指導教員によるプロセス評価及び審査員 2 名のループリック評価・概略評価から算出した「卒業研究 I」評価点内訳表に基づき単位認定案を承認し、教授会へ上程した。

・ 平成 29 年度転学部事前出願者の入学年次判定について

→応用生命科学部からの転学部希望者 1 名について、応用生命科学部における単位取得状況の確認、シラバス内容に確認を行い、入学年次の判定を行った。

【3月】

- ・ 平成 28 年度進級判定と最終成績確認について
→単位取得状況の確認、進級要件の確認を行い、教授会へ上程した。
- ・ 平成 29 年度転学部試験の実施
→試験当日の試験監督、面談について対応した。合否判定案について審議し教授会へ上程した。
- ・ 平成 29 年度学年暦・時間割について
→最終案の確認と教授会への上程。
- ・ ビデオ映像を利用した代替講義実施に向けたガイドラインの制定について
→平成 29 年度からの運用に備え、ガイドラインを制定。

2. 活動内容に関する自己点検・評価

上記のとおり教務委員会の活動内容は非常に多岐にわたり、活動量、教員負担も相当であったが、必要な事項について遺漏なく取り組めたことは評価できるものと思われる。教員負担を考えると委員会活動の効率化を図ることが大事であり、今後も担当課である事務部教務課と連携しながら、取り組んでいく必要がある。

定例的な業務が多い中、平成 28 年度の特徴的な取組みとして「薬学教育評価への対応」「新カリキュラム卒業研究指針の策定」「新カリキュラム進行に伴う旧カリキュラム学生への対応（講義のビデオ撮影、科目読み替え対応）」があげられる。

薬学教育評価の助言事項、改善すべき点について、現在のカリキュラムで対応できていない点が指摘されており、委員間で問題点を共有し今後も対応していくことが必要である。

新カリキュラム卒業研究指針の策定については年間を通して最も審議した事項であり、完成した指針は一定の評価ができるものであろう。

また、新カリキュラムの学年進行が進むにつれて発生する旧カリキュラム学生への対応についても平成 28 年度同様臨機応変に対応していきたい。

3. 問題点と改善・解決に向けた方策

薬学教育評価における指摘事項への対応が必要である。具体的には、過密となっている 6 年次のカリキュラム編成について改善が必須であり、関係委員会と協力しながら対応を考えたい。

また、新カリキュラムに対応した研究室配属の方法について検討を進める。特に、近年研究室配属後に研究室変更希望を申し出る学生が散見される。公平性の観点から安易な変更には慎重に対応する必要があるが、個別の事情に考慮しながら対応していくとともに、研究室配属方法の抜本的な見直しを検討したい。

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	学生委員会
構成員（委員長の名前の前に○） ○小室晃彦、高橋努、青木定夫、川原浩一、冨塚江利子、田代卓哉、武久智一、中川沙織			
1. 平成 28 年度活動内容 <u>学生行事に関連する活動</u> 4月：入学式、オリエンテーション、保護者説明会、保護者面談会、新入生歓迎会（学生支援総合センター） 5月：五頭薬用植物園研修 6月：運動会（学生支援総合センター） 7月：夏季卒業記念パーティー 10月：新薬祭、保護者面談会 3月：スキー・スノーボードスクール（志賀高原高天原スキー場）、卒業式 <u>具体的な業務</u> 学生名簿作成、アドバイザー名簿作成（新入生クラス編成含む）、駐車場関係、奨学金関連、学費減免、卒業記念アルバム作成、後援会、同窓会（薬樹会）、学友会、学生支援総合センター、体育施設、開放用具等、近隣地域住民（東島地区、朝日地区）との協議会（学生支援総合センター）、要支援学生の対応、学生トラブル等の対応、ICU ジェンダー研究センター講演の実施 <u>その他</u> 日本私立薬科大学学生部長会出席			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 本委員会は、薬学部の学生が学生生活の中で充実感を得られるよう、多角的にサポートすべく学生個々はもちろんのこと、学友会、地域住民、教職員などと意見を交わしながら、より良い学生支援策を検討し、実践してきた。 特に学生支援総合センターと連携を取りながら実施してきた、学生への配慮希望調査については、配慮希望の提出のあった学生と学生委員会が面談を実施し、配慮内容を学生と相談のうえ、対応を各部署と連携して決定してきた。次年度以降についてもこの配慮希望調査については、修学を途中で断念することの無いよう、学生支援総合センターと連携を強化しつつ、学生委員会として力を入れて対応を行いたい。また、ICU ジェンダー研究センター講演を企画、実施したが教職員間でも学生支援を考える良いきっかけ作りの場を提供できたと考えている。今後も同様の講演や研修などを学生委員会の立場から企画し、教職員全員の底上げを図りたい。			

3. 問題点と改善・解決に向けた方策

平成29年度は、以下の3点について改善・解決に向けた方策を重点的に検討する。

①新潟薬科大学奨学金制度の見直しについて

現在薬学部で実施されている、新潟薬科大学奨学金制度の効果の検証を行うとともに、新たに入試委員会から提案のあった特待生制度についての検討を行い、必要に応じて学生委員会主導で制度化を行う。

②アドバイザー制度の見直しについて

現在のアドバイザー制度は長年変更されていないため、学生委員会で予算計上しているアドバイザー活動費の予算配分も含めて、現在の体制の問題点などを平成29年度中に検証し、必要に応じて体制の変更を行う。

③保護者面談会全体会の実施方法について

春に行われた4年生から6年生の保護者面談会アンケート結果から、全体会について、6年生は就職・国家試験の対応に特化して話を聞いたかったという意見が多く出されたことから、全体会を4年生と5年生、6年生の2部構成に分けて実施するよう検討を行う。

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	キャリア支援委員会
構成員（委員長の名前の前に○）			
○酒巻利行、坂爪重明、川原浩一、笹木睦子			
1. 平成 28 年度活動内容			
平成 28 年度学内合同説明会についての協議（平成 28 年 4 月 1 日）			
平成 28 年度前期ガイダンスについての協議（平成 28 年 4 月 1 日）			
新潟薬科大学薬学部卒業生交流フェスタについての協議（平成 28 年 4 月 1 日）			
薬学部卒業生交流フェスタについて協議（平成 28 年 6 月 9 日）			
後期キャリアガイダンスについて協議（平成 28 年 7 月 26 日）			
平成 29 年度学内合同企業説明会の日程について協議（平成 28 年 12 月 1 日）			
履歴書の指導時期についての協議（平成 28 年 12 月 1 日）			
平成 29 年度キャリアガイダンス計画についての協議（平成 29 年 1 月 25 日）			
薬学部卒業生交流フェスタの開催			
9/10 新潟会場（ホテルラングウッド新潟）、10/8 宮城会場（ホテルメルパルク仙台）			
月ごとの就職内定調査の実施			
キャリアガイダンス			
1 年生	4/27	キャリア支援委員長から「医療人としての心構え・薬剤師・薬学生に求められること」マナー講座Ⅰ（伊勢みずほ氏；コミュニケーションの取り方）	
	10/28	職業理解Ⅰ（病院及び薬局の仕組みについて、海外での薬剤師の活躍について、薬剤師の活躍の場について、大学院への進学について）	
2 年生	4/15	自己理解（シバシン・ドット・コムによる適性検査）	
	7/1	マナー講座Ⅱ（菊野麻子氏；基本的接遇）	
	12/21	職業理解Ⅱ（病院・薬局・製薬企業（MR）・行政での薬剤師の仕事について）	
3 年生	10/6	職業理解Ⅳ（専門薬剤師について）	
	12/12	職業理解Ⅲ（新規）（その他の業界（品質管理、科捜研、防衛省、研究職）について） キャリア支援室長から「キャリアデザインを考えるⅡ」	
4 年生	10/20	職業理解Ⅳ（新規）（マイナビ主催講座）	
	2/9	ブンナビ薬学講座（ゲストスピーカー講演、OBOG ディスカッション）	
5 年生	4/14	マナー講座Ⅳ（菊野麻子氏；医療現場での接遇）	
		自己理解（シバシン・ドット・コムによる適性検査）	
		就職支援システムの活用方法（キャリア支援室より）	
	12/7	マナー講座Ⅳ（菊野麻子氏；面接対策）	
		就職活動対策講座（m3 キャリア主催講座）	
		就職活動における注意事項（キャリア支援室長より）	
6 年生	4/6	内定についての諸注意と 6 年次の過ごし方（キャリア支援室長より）	
		就職支援システムについて（キャリア支援室より）	
	4/6~8	学内合同企業説明会	

2. 活動内容に関する自己点検・評価

キャリアガイダンスの内容を見直し、プログラム内容が重複しないように考慮し、3年生の職業理解Ⅲ、4年生の職業理解Ⅳを新たに実施した。「マナー講座」と「職業理解」を各学年にバランスよく配置し、キャリア意識の形成を図っているが、ガイダンス開催時期に関しての学生からの苦情が多いのが現状である。また、卒業生交流フェスタの参加者を増やすために、申込み方法を FAX だけでなく、Web からも行えるように変更したが、卒業生交流フェスタの内容等を見直し、さらなる参加者増加に向けた策を検討する必要と思われる。学内合同企業説明会の3日目の学生参加者が少なかったため、何らかの対策が必要である。

3. 問題点と改善・解決に向けた方策

キャリアガイダンスの内容を見直し、プログラム内容の重複を避け、キャリア意識の形成につながるような順次性のあるプログラム内容にすべく検討していく。また、教務上のイベント等を確認し、キャリアガイダンスの開催時期をより学生にフレンドリーな時期にするよう検討する。卒業生交流フェスタは、同窓会や卒業生との連携を深めて、参加者を増やすための周知に力を入れていくと共に、内容も精査し、より良いものに修正していく。

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	入試実施委員会
構成員（委員長の名前の前に○） ○星名賢之助、久保田隆廣、本多政宣、白崎仁、飯村菜穂子、佐藤浩二、内山孝由			
1. 平成 28 年度活動内容 (1) 入試実施に関する活動：平成 28 年度入試（指定校推薦、一般推薦入試、高大連携講座推薦入試、社会人・学士特別選抜入試、一般入試Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期、センター利用入試 A・B 日程）について、実施に関する業務全般、判定業務を行った。新入生は 150 名となり、定員を大きく下回った。 (2) 指定校の県外拡充：指定校を過去の志願者数・入学者数、および入学後の成績等に基づき選択しなおすことにより、県内および県外ともに拡充した。また、出願資格となる評定平均値の見直しを広報アドバイザーの意見に基づき行った。 (3) H29 年度入試区分の見直し：i) 推薦入試における変更：評定平均 (3.5→3.0) および試験時間（実質的な化学の試験時間 40 分→60 分）への変更を行った。前者は門戸を広げて人物評価の機会を増やすという目的に基づいており、後者は、記述問題による総合力評価の導入を目指したものである。ii) 特待生制度の制定：学費減免制度を廃止し、入試による特待生制度を制定した。また、関連して、薬学部奨学金を廃止し薬学部特待生を導入した（学生委員会管轄）。結果として、減免額を拡大した特待生制度が 6 年間継続する制度を整備することとなった。			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 (1) 2 年連続定員割れとなった主要因は志願者の減少である。入試実施制度による志願者数への影響は考えにくい、学部全体と協力して原因の検証と対策をすべきだろう。入試実施については、出題に関するミス 2 件を除いては、問題なく行われた。対策として入学者選抜規定に基づいた作題過程およびチェック体制の取り決めを次年度に行うに至った。入試判定業務については、過去の入学者との相対成績と推定入学者数の 2 つの因子に基づいて判定しているが、学生確保優先という大学の方針に従い、合否ラインを下げざるを得ない状況である。 (2) 県外指定校からの入学者が 3 名（新規指定校から 2 名）となったことは、県外志願者増という観点から評価できる。 (3) の入試の変更については、次年度の結果待ちである。			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策 定員割れとそれに伴う学力低下という状況が、委員会としても学部としても対策すべき最優先課題である。志願者増を目指して入試実施委員会にできる方策は限られているが、志願者動向や成績追跡といった基本情報を学部全体へ提供し、とくに入試広報の観点からの学部各部署からの協力を得るべく活動する。入学者選抜という点では、引き続きアドミッションポリシーに適した人材を選ぶために、学力に加えて高校活動や人物評価を加えた選抜方法へ変えていく必要がある。 受験する側に大学の意図が伝わりやすい、高大接続改革に即した入試制度も整備していくことも効果的と考えられる。			

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	共用試験実施委員会 CBT 部会
構成員（委員長の名前の前に○） ○高津徳行、藤原英俊、島倉宏典、大貫敏男、笹木睦子			
1. 平成 28 年度活動内容 ○薬学共用試験 CBT の実施計画策定と実施ならびにその関連事項について、以下の通り対応を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・薬学共用試験 CBT 実施およびモニター説明会（6 月 11 日）への出席 ・CBT 体験受験の準備と実施（9 月 1、2 日）及びそれに伴う下記の業務等 <ul style="list-style-type: none"> 受験生講習会（8 月 26 日）の実施 監督者講習会及びテストラン（8 月 29 日）の実施 体験受験本学マニュアルの作成 ・CBT 本試験の準備と実施（12 月 1、2 日）及びそれに伴う下記の業務等 <ul style="list-style-type: none"> 受験生講習会（11 月 25 日）の実施 監督者講習会及びテストラン（11 月 28 日）の実施 本試験本学マニュアルの作成 ・CBT 追再試験の準備と実施（2 月 28 日）及びそれに伴う下記の業務等 <ul style="list-style-type: none"> テストラン（2 月 24 日）の実施 ・他大学（武蔵野大学薬学部）へのモニター員の派遣 			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 ・体験受験、本試験、追再試験は、いずれも特段の問題なく実施され、学生の不正行為等は確認されなかった。CBT の運営に、本学に起因する問題点は生じなかった。			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策 ・試験室 LAN のゲートウェイサーバが性能的に陳腐化しており、特に予備機の更新は必須である。本年は予算的に対応が難しいため、来年度での取り替え更新を行う必要がある。 ・本学の CBT 実施委員会 大学委員を務めてきた、CBT 業務に熟達した藤原委員が定年退職するため、後任者の選定が必要である。これに併せ、CBT 実施委員会 大学委員とシステム検討委員会 大学委員の選任・業務の熟達等を行う必要がある。			

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	共用試験実施委員会（OSCE 部会）
構成員（委員長の名前の前に○） ○坂爪重明、朝倉俊成、齊藤幹央			
1. 平成 28 年度活動内容 OSCE部会は薬学共用試験の公平性・透明性を保つように、以下の事項について、管理した。 <ul style="list-style-type: none"> ・ OSCE本試験事前審査書類作成 ・ 薬学共用試験センターの「実施要項」に基づいた本学版の実施マニュアル作成 ・ 学生に対する受験説明会 ・ 薬局・病院の学外評価者の募集 ・ 学内評価者直前講習会（11/28） ・ 評価者養成伝達講習会（12/11） ・ 学外評価者直前講習会（12/11） ・ SP 直前講習会（12/11） ・ 他大学（高崎健康福祉大学）への評価者 6 名派遣（12/3, 4） ・ 他大学（日本大学）への評価者 2 名派遣（12/10, 11） ・ 他大学（2 大学：高崎健康福祉大学 6 名、日本大学 2 名）からの評価者派遣（12/18） ・ OSCE 本試験の運営（12/18） ・ 他大学（日本薬科大学）の OSCE 本試験（1/27, 28）および再試験（2/25, 26）にモニター員 1 名を派遣 			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 ・ 外部モニター員および薬学共用試験センターにより事前審査の結果を受け、適正であると評価された。さらに OSCE 本試験に関しては、モニター員より「実施要項」に従った公正且つ厳格に実施されていたとの評価を受けた。 ・ OSCE実施前の評価者養成伝達講習会、学内・学外評価者直前講習会、SP講習会が適正に実施された。 ・ 薬学共用試験が評価者による偏りなく、公正かつ円滑に実施できた。			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策 特に問題となる箇所はなかった。 今後も公平性・透明性を確保するために本学の OSCE を管理していきたい。			

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	臨床実務教育委員会
<p>構成員（委員長の名前の前に○） ○朝倉俊成、青木定夫、久保田隆廣、坂爪重明、継田雅美、若林広行、渡邊賢一、阿部学、齊藤幹央、宮下しずか</p>			
<p>1. 平成 28 年度活動内容</p> <p>■4 年次科目「臨床実務事前実習」の計画策定・実施（5～7 月）</p> <p>（1）実習方略の作成 （2）臨床講師の選定</p> <p>■平成 28 年度「臨床実務実習」実施に関する対応</p> <p>（1）実習施設との契約締結 （2）実習施設訪問体制の構築 （3）実習施設向け説明会および平成 27 年度実習生の成果発表会実施 （4）ホワイトコートセレモニーの運営 （5）実習トラブル対応 （6）学生提出物（態度評価・総括レポート・成果プロダクト）指導・管理 （7）アドバンスト OSCE 実施 （8）学内実務実習報告会（SGD）実施 （9）実務実習報告書の作成（学外配布用）</p> <p>■平成 29 年度「臨床実務実習」実施に関する対応</p> <p>（1）病院実習枠（特別枠・関東地区調整機構枠）確保、県薬剤師会への薬局実習枠打診 （2）実習施設割振り （3）学生対象事前説明会および施設送付履歴書の添削・指導の実施</p> <p>■平成 28 年度薬学共用試験 OSCE 実施に関する対応</p> <p>共用試験実施委員会 OSCE 部会にて OSCE の基本方針が決定され、その方針に則って臨床実務教育委員会（拡大）で詳細を検討し、運営した（具体的な OSCE の実施内容については、「共用試験実施委員会 OSCE 部会」の自己点検・評価票を参照のこと）。</p> <p>■特定領域研修に関する対応</p> <p>（1）研修施設との研修内容の打合せ （2）5・6 年生対象研修報告会の実施</p> <p>■改訂モデル・コアカリキュラムに基づく実務実習実施に向けた対応</p> <p>（1）実習評価の骨子作成 （2）実習施設グループ化の検討 （3）県内病院・薬局の施設概要管理（アンケート実施）</p>			

- (4) 新潟県病院薬剤師会・新潟県薬剤師会との意見交換
- (5) 平成 29 年度実務実習時の評価トライアル実施の検討

■臨床教員（実務家）の研修（新津医療センター病院等）

2. 活動内容に関する自己点検・評価

平成 28 年度実務実習においてトラブルによる実習施設変更や医療事故等が発生したが、学内の迅速な情報共有および施設訪問等で特段の問題なく対応している。また、平成 28 年度実習施設の指導薬剤師を対象に平成 27 年度実習生による成果発表会を初めて実施したが、発表学生・指導薬剤師共に実習で得た知識を明確にする貴重な機会となった。来年度以降も継続して実施する予定である。また、現在他大学での取り組みも希少であるアドバンスト OSCE を、平成 27 年度実務実習生を対象に実施した。課題内容・評価項目等を含む運営に関して反省点を踏まえた改善は今後委員会にて継続して検討する。なお、改訂モデル・コアカリキュラムに基づく実務実習の実施に向けた準備を平成 28 年度より急速に進めており、県病院薬剤師会・県薬剤師会と協議の上グループ化および評価方針等の仕組み作りを順調に着手している。

3. 問題点と改善・解決に向けた方策

■改訂モデル・コアカリキュラムに基づく臨床実務事前実習実施に向けて

（方略の見直し・実習内容に即した臨床講師の選定）

■アドバンスト OSCE について

（評価項目・課題内容の検討）

■改訂モデル・コアカリキュラムに基づく臨床実務実習実施に向けて

（連携システムの改修・実習実施報告書の作成・ルーブリック評価表の作成）

■県内実習施設に対する本学の実習方針・評価内容等の周知

（OBE・ルーブリック評価等の基本的な内容に関する勉強会・セミナー等の検討）

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	薬学総括演習 I 実施委員会
構成員（委員長の名前の前に○） ○前田武彦、藤原英俊、高津徳行、中川沙織			
1. 平成 28 年度活動内容 以下の 3 点が主な活動内容である。 ・ CBT 模擬試験の実施（7 月、9 月、10 月、11 月に月一回実施） ・ 総括演習 I の運営（演習 65 コマ、確認テスト 5 回実施、単位認定試験 2 回実施） ・ 4 年次留年生対象の教育プログラムの実施（CBT 模擬試験過去問題利用の試験 5 回、模擬試験解説講義 5 コマ、補講 7 コマ）			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 ・ CBT 模擬試験については、試験実施のたびに成績が向上したことや総括試験成績との相関性がよく見られたので、実施の目標は達成されたと判断する。回数と時期についても妥当であると判断した。 ・ 総括演習 I の運営については、演習への学生の出席率や、単位認定試験の成績は昨年度とあまり変わりは無かった。その後の CBT 試験の成績と比較すると、演習の意義や試験の難易度について、妥当であると考え。ただし、総括試験の平均正解率が著しく低い分野がみられた。 ・ 4 年次留年生対象の対策については、前年度試験不合格の学生について、模擬試験を実施したが、出席率も悪く、効果があったとは言い難い。その結果を踏まえて、28 年度試験不合格の学生の対策を実施したが、出席率は前年度の学生に比べると高いが、出席者は固定されている。その効果については、次年度の成績を分析しないとわからない。			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策 ・ 総括演習 I の授業について 旧カリキュラム最終年度になるが、次年度同様の要領で実施する。総括試験における正答率の低い分野については、作問段階で適正な難易度のレベル設定への要請や、分野担当教員間でのブラッシュアップの徹底をお願いします。30 年度より新カリキュラム対応の演習となるが、既に決定されているコマ数の変更や分野間で濃淡をつけたコマ数割当等を検討し、当該科目の目標に沿う演習内容を考案する。 ・ 4 年次留年生対象の教育プログラム 多くの時間を割いて、委員の協力の下、プログラムを実施してきた。シラバスに記載されているような正規の授業ではなく、あくまでも、出席は学生の自由意志に基づくものである。従って、出席率は芳しくなかった（毎回、3 名から 8 名の出席者）。その効果の検証は次年度の成績を待たないとわからないが、総括演習 I 単位認定試験の成績の分析を詳細に行ない、次回の対策につなげる。			

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	薬学総括演習Ⅱ実施委員会
構成員（委員長の名前の前に○） ○本澤忍、前田武彦、安藤昌幸、島倉宏典、久保田隆廣、田辺顕子、藤原英俊、青木定夫、坂爪重明、阿部学、山口利男			
1. 平成 28 年度活動内容 <ul style="list-style-type: none"> ・薬学総括演習Ⅱの企画・計画立案、調整 （6年生へのアンケート実施、成績追跡及び、成績が伸び悩んでいる学生への学習指導） ・卒業延期生の演習の企画・計画立案、調整、実施 ・5年生リマインドテストの実施（8月・12月） ・5年生実務実習期間中における課題の企画・実施 ・各種卒業試験問題の作成依頼・作製・調整・推敲 			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 <p>薬学総括演習Ⅱの企画運営に関しては、概ね例年通り実施してきた。それ以外には、6年生の学習状況の把握のために後期演習実施前に学習状況アンケートを実施し、成績と学習時間・態度との関連について比較検討を行った。しかしながら学生から得られた回答を十分に解析しきれず、学生の学力向上支援がうまく機能していないように感じられる。</p> <p>5年次学生に対しては、学力低下を食い止めるために、例年実施しているリマインドテストに加え、実務実習中に関わった医薬品について調査する課題を課したが、実習施設に対する説明が十分でなく、学生・実習施設ともに負担が大きいとの声が多く聞かれたので、方略を含めて再検討する必要があると考える。</p>			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策 <p>平成28年度実施の教育評価において、国家試験対策のための演習として見られてもおかしくない科目として指摘を受けた。本科目は6年生の総括のための科目であるとの位置づけを再認識し、その目的にかなうような方略（演習方法、教材、評価方法など）について検討していきたい。</p> <p>5年次学生に対しては、リマインドテストの実施を継続するとともに、外部試験の導入、演習の実施などについて、教務委員会と連携をとりつつ実施していきたい。</p>			

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	自己点検・評価委員会
構成員（委員長の名前の前に○）			
○北川幸己、杉原多公通、朝倉俊成、酒巻利行、山口利男			
1. 平成 28 年度活動内容			
<p>薬学教育評価機構による「教育評価」を受審する年度であることから、薬学部自己点検・評価委員会は薬学部将来計画委員会、薬学部教務委員会と連携して、「教育評価」の対応に注力した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育評価「自己点検・評価書」の作成 ・教育評価「評価グループ」からの質問等の対応 ・教育評価「評価報告書（案）」への対応 ・教育評価「評価グループ」訪問調査（10月27日、28日）の対応 ・教育評価「最終評価（案）」への対応 			
2. 活動内容に関する自己点検・評価			
<p>薬学教育評価への対応を本年度の主活動としてきた。薬学教育評価は幸い認定を得たが、その中で自己点検・評価に関して次のような評価がなされている。</p> <p>『薬学部の自己点検・評価結果については、外部への公開を行っていない。また、教員個人および委員会活動の評価結果を教育研究活動の改善に反映させる体制は整っておらず、個々の教員自身もしくは委員会の意識と意欲に任せる形になっており、結果として改善に向かっていない。』</p> <p>当然の指摘と受け止めているが、現在検討中となっている「教員評価制度」、さらに平成 29 年度に予定されている「新潟薬科大学第 2 期中長期計画」の総括と「第 3 期中長期計画の設定」と関連して、全学的な評価制度との整合性を考慮しながら、薬学部の自己点検・評価を進めていく必要がある。</p>			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策			
<ol style="list-style-type: none"> 1) 全学的な「教員評価制度」を見据えて、応用生命科学部とある程度の統一をもたせた薬学部自己点検・評価票の修正版を提案するとともに、自己点検・評価の実施と報告書の作成を行う。 2) 全学的な「教員評価制度」を開始するにあたっては、従来の自己点検・評価票がその基礎資料となるものと思われる。ただ「薬学教育プログラム」に関する自己点検・評価は、全学の「教員評価制度」とは別個に考える必要がある。 3) 薬学教育評価で指摘された改善すべき事項に対して、関係する委員会（将来計画、教務、FD など）と連携して対応し、改善策を提案していく。 			

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	薬用植物園運営委員会
構成員（委員長の名前の前に○） ○白崎仁、渋谷雅明、大貫敏男			
1. 平成 28 年度活動内容 4月　：管理組合で五頭薬草園管理運営会議（阿賀野市役所） 5月　：1年生の五頭薬草園研修会で、白崎、渋谷、大貫が、引率と薬草の解説を行った。 6月　：五頭薬草園園開き会で薬用植物の講演と園の薬草観察会 9月　：管理組合で五頭薬草園管理運営会議（阿賀野市役所） 10月：五頭薬草園でキノコの観察会 研究室の4、5、6年生卒業研究で研究指導、植物学、生薬学、及び同実習における利用のため本園内の環境整備を行った。			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 本園の環境整備については、順調に行っている。植物学及び、生物学研究室の卒業研究における学生の利用頻度は高い。生薬学における本園利用はなかった。 五頭薬草園については、阿賀野市商工観光課と管理組合の協力により整備されて、1年生の研修会は問題なく実施された。			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策 阿賀野市商工観光課では、市職員の減少や配置換えにより、五頭薬草園の管理が遅れがちである。イベントの企画・準備は行っているが、集客力が不足がちである。阿賀野市に依存するだけでなく、地域住民の認識が薄いと思われるので、今後、管理組合の委員を検討する必要がある。阿賀野市に改善を求めたい。 本園は、設立以来10年以上が経過して、温室の外壁の経年変化が見られる。今後、補修が必要で、補修資金の準備が必要である。			

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	研究科教務委員会
構成員（委員長の名前の前に○） ○酒巻利行、上野和行、青木定夫			
1. 平成 28 年度活動内容 <ul style="list-style-type: none"> ・私費外国人留学生の授業料減免についての審議（平成 28 年 4 月 25 日） 博士課程 3 年生、博士課程 4 年生の各 1 名について、授業料を半額免除とした。 ・博士課程早期修了に関する予備審査についての協議（平成 28 年 12 月 12 日） 臨床薬理学研究室の 3 年生 3 名の早期修了について、「在学期間の特例に関する申し合わせ」に従って、予備審査に関するスケジュールや必要書類等の対応について協議し、決定した。 ・在学期間短縮に係る学位論文予備審査についての協議（平成 28 年 12 月 19 日） 早期修了を希望する臨床薬理学研究室の 3 年生 3 名のうち、2 名については、予備審査委員会の設置を認めることとした。 ・平成 28 年度新潟薬科大学大学院奨学金奨学生の選考（平成 28 年 12 月 19 日） 申請者の博士課程 4 年生に対して面接を行い、奨学生として相応しいと判断した。 ・学位論文審査申請書類確認についての協議（平成 29 年 1 月 23 日） 申請者の 4 年生 1 名及び早期修了希望 3 年生 2 名合計 3 名の論文審査申請書類について点検を行い、問題ないことを確認した。 ・学位論文発表会実施についての協議（平成 29 年 1 月 23 日） 学位論文発表会の時間、座長、タイプキーパーを決定した。 ・学位論文審査書類の差し替えについての協議（平成 29 年 1 月 30 日） 申請者 1 名の主たる論文としてあげられていた 2 編の論文のうち 1 編を参考論文とすることを承認した。 ・博士論文審査に関する申し合わせの確認（平成 29 年 1 月 30 日） 論文審査委員会についての要件を確認した。 ・平成 28 年度薬学研究科博士課程学位論文発表会（平成 29 年 2 月 17 日；発表者 3 名） ・平成 28 年度薬学研究科学業成績についての協議（平成 29 年 3 月 9 日） 臨床薬理学研究室の 4 年生 1 名及び早期修了希望 3 年生 2 名合計 3 名について修了要件の確認を行い、基準を満たしていることを確認した。 ・平成 29 年度薬学研究科論文審査日程及び学年暦についての協議（平成 29 年 3 月 9 日） 平成 29 年度の論文審査日程及び学年暦を決定した。 ・平成 29 年度開講科目担当者及び時間割についての協議（平成 29 年 3 月 9 日） 退職となる大学院担当教員が数名いるため、担当者の見直しを行った。 ・シラバスの点検についての確認（平成 29 年 3 月 9 日） 薬学研究科のシラバスが、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーに沿った内容であるかを、シラバス校正の際に委員会で分担して確認を行うこととした。 			

2. 活動内容に関する自己点検・評価

博士課程早期修了に関する案件は4年制大学院で初めてのケースであったため、対応が遅れた感があるが、厳密な審査がされた。学位論文審査委員会のメンバーの選定についても、申し合わせに従って正しく実施された。その他、例年行っている件（授業料減免、奨学金給付、学年暦等）については、予定通り実施された。

3. 問題点と改善・解決に向けた方策

今後、大学院担当教員の退職が予想されるケースについては、担当者についての協議をできるだけ早く行い、適切な教育が行えるように先を見越して対応していく。来年度は、課程によらない博士学位論文の審査申請が予定されているので、こちらについても適切に対応するべく、早めに準備していく。

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	研究科入試委員会
構成員（委員長の名前の前に○） ○上野和行、大和進、久保田隆廣、川原浩一			
1. 平成 28 年度活動内容 薬学研究科博士課程および応用生命研究科博士前期課程（薬科学コース）それぞれにおいて、前期と後期の 2 回の入学試験を実施している。そこで各課程における活動内容を記載する。 （1）薬学研究科博士課程 1 期入試は 9 月 8 日、2 期は 3 月 7 日に実施した。それぞれの入試に対して、基礎薬学、医療薬学、および臨床薬学の 3 領域における英語試験問題を委員会として作成した。その結果 1 期では 2 名の受験者があり、英語筆答試験と面接試験の結果 2 名を合格とする資料を委員会として作成した。その後の大学院薬学研究科委員会にて 2 名は合格となった。2 期においても同様に試験問題等を委員会として準備したが、受験者は 0 名であった。 （2）応用生命研究科博士前期課程（薬科学コース） 1 期入試は 9 月 9 日、2 期は 3 月 7 日に実施した。それぞれの入試に対して、英語試験問題として、有機創薬、生物、および医療科学系の 3 領域から、かつ専門分野 9 科目からの試験問題を委員会として作成した。その結果、1 期では受験生が 1 名あり、筆答試験と面接試験の結果、その 1 名を合格とする資料を委員会として作成した。その後の大学院薬学研究科委員会にてその 1 名は合格となった。2 期においても同様に試験問題等を委員会として準備したが、受験者は 0 名であった。			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 委員会として、試験問題などを準備したが、受験者が少ない現状がある。医療の高度化、多様化などを考えれば、医療現場の薬剤師の研究活動なども今後重要性を増してくると考えられる。そのためにも、大学院において研究活動を学ぶことは非常に重要と考える。本年度の受験者が少なかったが、次年度に向けて、対策を講じたい。			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策 6 年制に移行してからの博士課程への入学希望者が少ないことを考慮すれば、薬学出身者以外へ呼びかけも重要であると考え、前期課程の入学希望者も少ない点を考慮すれば、社会人入学者への広報などを通じてより広く希望者を募る必要性も感じる。そのために他大学の社会人入学に対する入試状況などを調査し、今後の対策を講じたい。また研究室単位でも卒業生に対する、卒後教育の一環とした、大学をあげての取り組みも必要と考える。一方、大学病院など基幹病院では薬剤師教育や研究成果を問われるようになってきた。そのためにも学位を取得することに対する医療現場の薬剤師の声が聞こえてきている。このような声に対する大学院としてのニーズが大きいので、博士課程入学希望者への支援も検討する必要があるが、教務との関係もあり、今後の課題としたい。			

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	研究科自己点検・評価委員会
構成員（委員長の名前の前に○） ○北川幸己、皆川信子、福原正博			
1. 平成 28 年度活動内容 1) 研究科としての自己点検・評価委員会は開催しなかった。 2) 研究科教務委員会と協働して、『平成 28 年度文部科学省委託事業「大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業」：「薬学教育の改善・充実に関する調査研究」』として日本薬学会から依頼があった「大学院 4 年制博士課程の現状把握及び分析」アンケート調査の書類作成を行った。			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 1) 大学院に在籍する学生の数も少ないことから、大学院生が在籍していない研究室教員の関心は低調であり、研究科全体で大学院に関する自己点検を行うという機運が高まらない。 2) また、大学院学生のうち外国籍の学生が多くを占めることから、大学院での講義（特別講義、特別授業）に関しての授業アンケートや満足度調査ができていない。			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策 1) 大学院に在籍する学生に対して、研究室での研究実施体制、講義・演習の実態についてヒアリングを行う。 2) 6 年制薬学生の中から、毎年コンスタントに数名の博士課程進学者を確保できるような方策を研究科教員全体で考える。 3) 同時に社会人大学院生の修学環境をなお一層整備することも必要である。 4) 平成 28 年度を含めて今後数年内に定年退職する教員が多いことから、研究科としての講義・演習の枠組みを研究科教務委員会と協働して再構築する。			

平成 28 年度 自己点検・評価票（委員会等）

組織区分	薬学部	委員会等名	研究科 FD 委員会
構成員（委員長の名前の前に○） ○前田武彦、渋谷雅明、安藤昌幸			
1. 平成 28 年度活動内容 なし。			
2. 活動内容に関する自己点検・評価 なし。			
3. 問題点と改善・解決に向けた方策 4 年制の薬学研究科博士課程においては、過去の在籍者として外国人留学生が多く、また一部の研究室に偏在していたことから効果的な FD 活動が難しい状況があった。全学研究委員会のもとで、研究倫理に関する WEB 講習を受講することを教員及び大学院学生に義務化しているが、FD 委員会でも応用生命科学研究科と連携して、研究倫理に関する FD を毎年開催するように努める。 また薬学研究科で開講されている講義、演習等については、主催する研究室の方針に任せきりになっていることは否めず、研究科教務委員会と連動して在学者へのヒアリングなどから実態と大学院学生の満足度を調査する必要がある。 設置申請時からは教員の入れ替わりもあり、薬学研究科での開講科目の見直しは必要と考えており、さらに次世代の人材育成の観点からも大学院への進学率を増やしていくことを含めて研究科全体での議論を踏まえて改善していく。			